



わたしの聖戦

女性が働くといふこと

140

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

さよなら、ロマンポルノ

半年ほど前、熊本出張の際に見かけた看板は、私の興味をひどくそつた。そこには「谷ナオミの店」とあったのだ。谷ナオミと聞いて、私と似たような感慨を持つのは、恐らく私より少し年配の方々だろうと思う。若い人には馴染みがないかもしれないが、かつて「ピンク映画」とか「日活ロマンポルノ」と呼ばれた映画が盛況だった時代、

谷ナオミはこの種の映画で大いに活躍した女優のひとりであった。

日活ロマンポルノは、低迷する映画業界の苦肉の策として日活が打ち出した新路線であり、当時一世を風靡した。年表を

調べると、最初にロマンポルノがスタートしたのは1971年、その終焉は1988年である。ということは通算17年間にわたり、日活ロマンポルノは日本の映画界を支えてきたことになる。

当時、私は20歳前後。若い女性の極く普通の反応として、「ピンク映画」「ポルノ映画」と聞いただけで眉をひそめ嫌悪感を抱いたものだ。町にその種のポスターでもあろうものなら、汚らわしい感情ばかりが勝り、決して正視などできなかった。

ところが、時を経て、当時ポルノ映画の主演を

張った女優たちをテレビドラマで見かけるようになった。例えば、白川和子や宮下順子などである。演技がうまいとか下手とかいう以前に、彼女たちには独特の存在感と妖しさがあり、脇役でありながら目が離せなかったことを憶えている。さらに、今から15年ほど前、映画



雑誌では「女性のためのロマンポルノ」という特集が組まれ、当時レンタルDVDの普及が著しかったこともあって、女性でも自宅でロマンポルノを見ることのできる時代を迎えた。映画好きな私は、数ある作品の中でも名作と呼ばれているものをいくつか選んで鑑賞し、

今となっては懐かしい昭和の匂いと女優たちの美しさを堪能した。

谷ナオミの代表作は「花と蛇」。上品で裕福な奥様が、瞬間にSMの世界に堕ちていくという内容で、何より谷ナオミの凛とした美しさが印象に残った。その後違う女優でいくつも続編が作られたが、谷ナオミには到底及ばない出来で、そうなると思えば彼女の存在感ばかりが強く脳裏に刻まれることになった。他の女優もまたしかり、である。

その頃のインタビューで、宮下順子の話は今でも覚えている。当時、新婚の若き妻たちが彼女を訪れ、ある「相談事」を持ちかけたというのだ。いわく、いったいアノ時にどんな声を出したらいいか、どんな風に振る舞えばいいのか、と。真面目に聞いてくる若妻たちに対し、あれはみんな演技だと正直に答えるしかなかったという。そ

う、どんなに色っぽくても女優たちは皆一生懸命演技をしているに過ぎなかったのだ。思いのほか、男っぽく潔いポルノ女優たち。私は彼女らのそんな「覚悟」を好んだのだと思う。

さて、熊本である。私はさすがにひとりで「谷ナオミの店」に入る勇気がなく、後々ずっと後悔の念を抱いていたが、つい先日再び熊本出張の機会を得た。今度こそ、と意を決し、思い切って店のドアを押しした。御年60を過ぎた谷ナオミを一目見たかったのだ。：ところが店には若い女子ばかり。聞けば彼女は昨年引退し、店にはもう出ていないとのことだった。ああ、残念！：と思いつつ、結局スクリーンの彼女の思い出だけが残ったことにどこか納得し、華やかな熊本の繁華街をあとにしたのだった。

イラスト・伊藤栄章